

共創で得た成果を組織に取り込むことは、自社単独では得られない外部の知見やノウハウを吸収することであり、「成果」を正しく認識し、それをうまく取り込むことができれば企業の成長は一段と加速する。一方で、「成果」を

③社内展開のステップで進める。
①評価では、当初に設定した目的や目標と照らし、

々のメンバーの貢献度を適切に評価することも重要となる。また、期待通りの結果が得られた際には、社内表彰等を通じてモチベーションを高めることが、次の活動への意欲を促進することにもつながる。
②見える化では、共創に

的場 諒（まとは・りょう）
コンサルティング事業本部経営戦略第2部マネジャー



活動の評価と取り込み

共創時代の戦略(4)

で評価し、本質的な成果を十分に取り込むことができている企業も存在する。まず、検討の手順としては①適切な評価とフィードバック②成果物の見える化

成果を測定する。一般的には、報告会を実施して経営層から活動メンバーに対してフィードバックを行うことが多い。このとき、活動の具体的な成果に加え、個

よって得られたノウハウや知見が、メンバーの個人的なものとしてとどまることを避けるため、活動の成果物や教訓などをデジタル化して残すことをお勧めする。この際に重要なのは、結果が伴わなかった活動に

対しても同様に記録化し、その中で活動のプロセスや、うまくいかなかった事象と原因分析などをしっかりと整理することである。企業によつては、失敗事例に対する見える化が未実施のため、いつの間にか活動自体が「なかったこと」

を社内になじませ、自社の強みとして活用していく段階である。ここでは、「従来の社内のやり方」とのギャップを念頭に、段階的に進めることが良い。組織風土にも関連するが、従来とのギャップが大きいほど、加えて展開のスピードが速

いほど、社内で抵抗感を持たれやすく、受け入れが進みづらい傾向にある。そのため展開の初期段階では成果物や分かりやすいノウハウ(TIPS)の共有から始め、その後に定期的な社内勉強会などを通じて徐々に本質的なエッセンスや学びなどをなじませていく段階的な取り組みをお勧めする。
共創活動では、売り上げ獲得など定量的な成果に加え、外部の知見やノウハウを社内に取り込み、成長を加速させるといったソフト面の効果も期待できる。不確実性の高いVUCAの時代を生き抜く戦略として、活用を期待したい。
(毎週木曜日に掲載)

